【東日本大震災（宮城県仙台市）救護活動報告】

呼吸器科医師　長野　宏昭

3 月 11 日午後、地震は弱いながらも、かなり長く続いた印象でした。直後に国際救援部から「今から行くかもしれないので待機しておくように」と電話がかかりました。急な召集に戸惑いつつ、バスに乗り込みました。行きは陸路で被災地の仙台に向かいました。途中、道路が陥没し、瓦礫が散乱し緊急車両以外は通れない道も通り、宮城に入るのに 23 時間かかりました。

宮城県庁に日赤救護班大阪支部の活動拠点となる救護 dERU（仮設診療所）を立ち上げ、診療を開始しました。県庁では電気、水道は使用可能で、建物の損壊も少なかったものの、県庁には家を失った人々、ライフラインが断たれ生活の場を失った人々、旅行中で帰る手段が無くなった人々であふれており、寒い避難所の生活で体調の不良を訴える人や、常備薬を無くし請薬に来る人などで受診者が後を絶たず、11 日夜だけで 50 人、12 日には 80 人余りの方が受診に訪れました。初日は寝る場所がなく、全員テントで寝ましたが、その寒さは関西の比にならないほど厳しいものでした。「体が凍り付いて動かない」という表現が適切ではないでしょうか。

今回の地震では津波の猛威がすさまじく、外傷患者は即死か、超重症で救命できない人が多いようでした。救護所では、高血圧、頭痛、上気道炎、胃腸炎、喘息、外傷（軽い切り傷、擦過傷）などの軽症患者がほとんどでした。津波で家や会社を全て失い、自転車で石巻から仙台まで必死で逃げてきた人もいました。13 日以降は dERU を離れ、仙台市青葉区や若林区の避難所を巡回診療も行いました。採血やレントゲンなどの検査も全くできない状況下での診察は、検査に慣れた大病院の医者にとって不安に思う事も多かったですが、患者さんの訴えに耳を傾け、患者さんに少しでも安心感を与える事が今回の使命だと思い、できる限りの仕事はやれたのではないかと思います。

今後は小児や高齢者、旅行者などの災害弱者の体調管理、心のケアが今後の重要になるのではないかと思いました。また、物資に関しては寒さをしのぐ毛布、ガソリンや灯油、水、生理用品などの確保が急務ではないでしょうか。被災された方々の不安や悲しみは想像以上のものであり、それが身体面に影響することは想像に難くないと思われます。私たちの活動が、少しでも被災された方々のお役に立てればと思う次第です

12B病棟　看護係長　直本　宏

私たち初動班は、地震発生直後に大阪赤十字病院を車両で出発し、どこでどのような活動をするのか不安と緊張を抱えながら被災地に向かいました。丸一日かけて到着した宮城県の仙台市内の様子は、海岸沿いが津波により壊滅状態であり、それ以外の場所は建物の被害は少ないものの電気や水道といったライフラインに大きな被害があり、地元の自治体も把握しきれないほど多くの避難所がありました。私たちはその中心地にある宮城県庁前でdERU（国内型緊急対応ユニット）を展開し、24 時間体制の救護所を開設するとともに、仙台市内一帯の避難所の巡回診療を行いました。救護所には毎日多くの方が訪れ、巡回した避難所は人であふれかえっていました。その医療ニーズの主なものは、持病の薬がない、または風邪症状、頭痛、下痢、軽症の外傷などで、対象者も新生児から妊婦、高齢者と幅広いものでした。

私が今回の救護活動で最も感じたことは災害急性期からのこころのケアの必要性でした。救護所では診察中に過換気症状が出現する人や急に泣き出す人もいました。毎日のように救護所を訪れる人もいました。みんな身体症状を訴えてくるのですが、その奥には災害による大きな不安を抱えていることが感じられました。また、津波被害周辺の避難所には、いまだに家族の安否が確認できない方、家や車などすべてを流された方が多数おり、その心の傷はとても深いものでした。私たちは被災者の方々が不安をため込まずに吐き出せるように、ゆっくり話を聴くことをこころがけ、少しでも安心感を与えられるように声をかけました。それにより「ありがとう」「ほっ

としました」と涙を流したり、表情が和らいだ様子から、少しは効果的な関わりができたのではと思っています。この災害では津波が大きな被害をもたらしており、多くの行方不明者がいます。そのため不安定な気持ちのままの被災者が多数おり、こころのケアも長期的、継続的な関わりが必要になると思います。

被災地の一刻も早い復興を祈っています。

巡回診療

被災地の様子

dERU 用テント内の診察場